令和８年

１１月の重要農作業

四国中央市農業振興センター
《問い合わせ先》
四国中央農業指導班　TEL 23-2394
（畜産）東予家畜保健衛生所　TEL (0897)57-9122

【天気予報及び概況】

天気は数日の周期で変わりますが、低気圧の影響を受けやすいため、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。気温は高い見込みです。降水量は平年並みか多い見込みです。

	平均気温（℃）	最高気温（℃）	最低気温（℃）	降水量（㎜）
2025年	13.0	17.6	8.9	14.5
2024年	13.6	17.9	9.8	94.5
2023年	13.5	17.7	9.3	53.5
1991～2020年	13.2	17.0	9.5	69.5

※気温については、１１月の平均値（気象庁）

【作　物】

1　小麦・裸麦

(1) 土壌改良剤
播種前に苦土石灰80～150kg/10aを施用してください。

(2) 施肥
基肥は、化成444をドリル播栽培で40～50kg/10a、全面全層播栽培で50～60kg/10a施用してください。

(3) 適期播種
播種適期は11月中旬ですが、降雨等で土壌水分が高い場合には湿害（発芽・出芽不良）を招くので、気象予報を参考に計画的に作業を進めてください。
播種量は、ドリル播栽培で7kg/10a（目標苗立率150本/㎡）、全面全層播栽培で13kg/10a（目標苗立率200本/㎡）程度です。
なお、播種が遅れる場合は播種量を増量してください。

(4) 湿害対策
播種作業時または作業後に、圃場の周囲及び３～５m間隔に排水溝を設置し、雨水が排水できるようにしてください。
また、排水溝は必ず圃場の外まで導いて、水が停滞しないようにしてください。

(5) 除草剤の散布
播種直後（雑草発生前）にクリアターン乳剤500～700mℓ/10aまたは播種後から麦３葉期（雑草発生前からイネ科雑草１葉期まで）にリベレーターフロアブル（60～80mℓ/10a）を水100ℓに希釈し、均一にムラなく散布してください。

2　水田の土づくり（収量・品質向上対策）

急激な環境変化（長雨・干ばつなど）に強く品質の良い米づくりを行うためには、土壌条件を良好な状態に保つ「土づくり」が重要です。

(1) 有機物の施用
完熟堆肥が望ましく、施用量は目安としてオガクズ堆肥（牛ふん1,500kg/10ａ、豚ぷん1,000kg/10ａ）、乾燥鶏ふん100kg/10ａです。
また、稲わらは年内に全量還元してください。

(2) 土壌改良資材の施用
有機物（堆肥・稲わら）と同時に㊐美土里60kg/10aを施用することで地力向上が図られます。

(3) 深耕について
根の分布拡大を図るため、作土深15cmを目標に深耕してください。

＜松本＞

【野　菜】

1　さといも・やまのいも栽培予定地のバスアミド微粒剤による土壌消毒

さといも、やまのいもを長年栽培した圃場では、次の土壌病害や雑草の発生が多く見られます。

○ さといも　：乾腐病、ネグサレセンチュウ、一年生雑草など
○ やまのいも：根腐病、褐色腐敗病、一年生雑草など

病原菌は被害残渣とともに土中に長く残り、４～５年後に作付けしても発病することがあります。

【対策のポイント】**耕種的防除とバスアミド微粒剤の散布**を実施

１ 水稲を３～４年以上栽培し、長期の輪作とする。
２ 種芋は、無病畑から収穫した健全な芋を使用する。
３ 種芋は、消毒を必ずおこなう。
４ 土壌消毒剤「バスアミド微粒剤」を使用する。

使用時の注意点　① 適切な土壌水分量の確保　圃場の耕運・整地
② 使用量　20～30kg/10a　③ 散布方法　専用の散布機（バスサンパー）利用
④ 均一な土壌混和（ロータリー耕）　⑤ 放置（約２か月）➡ガス抜き（耕運）
ヨトウムシ類の発生が多かったほ場では、収穫終了後、早期に耕耘等の後片づけを行ってください。

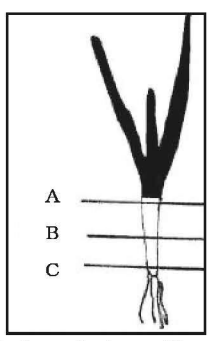
＜徳永＞

2　やまのいもの生産振興

やまのいもは、販売単価が安定していることに加え、マルチ栽培など省力化も進んでいます。また、栽培開始時に必要な種芋及び支柱の購入費用にかかる助成制度（1/2以内）もありますので、栽培に関心のある方は、ＪＡうま営農指導販売課 奥原、または、農業指導班 三谷まで連絡してください。

＜三谷＞

3　タマネギ



晩生品種「もみじ３号」は、11月下旬に株間10～12cm、条間20～25㎝で植え付けます。苗は鉛筆以下の太さ（５～６㎜）を用います。
植付けは、根が地表に出ないように注意し、植付けの深さは２～３㎝（右図のBの深さ）程度で土に埋めるようにします。
深植えしすぎると翌春の生育が悪くなることがあります。
定植後は、活着を促進するために灌水し土壌を十分に湿らせてください。また、降雨後の排水対策も心がけてください。
抽台を起こす原因は、①大苗を植えた場合や定植後の高温による過剰生育、②冬場の窒素不足（施肥が遅れたり、肥料が少なかったり、乾燥や除草剤で根傷み等を起こし植物に吸収されなかった場合）等が考えられますので注意しましょう。

＜徳永＞

【果　樹】

1　温州みかん

(1) 腐敗防止対策
腐敗果の発生を防止するために、収穫前の腐敗防止剤（トップジンM水和剤2,000倍（収穫前日まで））の散布を徹底してください。
収穫は、果実品質のバラツキを避けるために着色が早い樹冠外周、上部から分割採収し、果実を丁寧に扱って、腐敗果の発生・混入を防いでください。

(2) 樹勢回復
樹勢を回復させ、翌春の花芽・新梢の形成を促すために、早生温州は10月下旬頃、普通温州は11月上旬頃までに秋肥を施肥します。樹勢が衰弱している場合は、収穫後に液肥葉面散布を積極的に行ってください。
また、降雨がなく土壌が乾燥する場合は、灌水を行います。

(3) 次年産の着花過多対策
本年産の着果が少なく、夏秋梢が多く発生した樹は、次年産の着花過多を防ぐために、夏秋梢の整理を行います。側枝上の強い直立枝や内向枝は基部から除去します。外周部の夏秋梢は立ち枝を間引き、横枝を１本だけ残して結果母枝とします。樹全体の日照条件を考慮して、夏秋梢は50～60%程度残します。

2　中晩柑類

(1) 甘平、愛媛果試第28号（紅まどんな）
甘平は、収穫期までに土壌の乾燥が進む場合は、少量灌水を行います。
果実への袋掛けやサンテ被覆は、８分着色以降に行ってください（時期が早すぎると、果梗部周辺を中心に着色が阻害されることがあります）。
愛媛果試第28号（紅まどんな）は、果皮障害の発生に注意する時期です。
屋根掛け栽培や樹体被覆では、夜露や降雨によって果皮が濡れている時に果実の周辺が高温になると、果皮障害の発生が助長されます。果実表面を濡らさない（早く乾かす）、また、高温にならないように工夫してください。

(2) その他
中晩柑類の秋肥の施用は、11月上旬頃までに実施してください。
袋掛け等が必要な品種（せとか、不知火等）は、８分着色頃に袋掛けを実施します（時期が早すぎると、着色不良や品質低下を招く恐れがあります）。
収穫期までは、土壌乾燥が進む場合は、適宜、灌水を行ってください。

＜三谷＞

【花き・花木】

1　ラナンキュラス（球根養成栽培）

本圃の土壌消毒
白絹病の発生が見られる圃場では、必ず土壌消毒を行います。気温が15℃以下になると処理期間が長くかかるので、早めに行います。
バスアミド微粒剤20～30kg/10aを均一に散布して土壌と混和し、散水してビニール被覆します。20日後程度でガス抜きを行ってください。

2　アネモネ（球根養成栽培）

発芽後の除草
発芽後は、アネモネの芽、根を傷めないようにピンセット等で丁寧に除草してください。

3　シキミ

実生（種子）繁殖
10月上中旬に採種した小葉優良系統の成熟種子を、10月下旬～11月上旬に播種します。事前に窒素･燐酸･加里各１kg/a施用し、床幅１m、通路30cmくらいに畝立てした播種床に１㎡当たり600粒を２～３cm間隔で播種し、細土を１cmの厚さに覆土します。
出芽後、敷草をするとともに寒冷紗により50%程度の遮光を行い、乾燥と鳥害に注意して管理します。翌年３月下旬に掘り上げて移植してください。

＜浜田＞

【畜　産】

1　家畜の防寒対策

11月中旬以降、最低気温が10℃を下回る日が増え、特に幼畜は寒さで体調を崩しやすくなります。巻き取りカーテンや屋根の断熱材は有効ですが、畜舎を完全に密閉するとアンモニアなどの有害ガスが溜まり、呼吸器障害の原因となるため注意が必要です。外気が直接幼畜に当たらないよう換気の流れを工夫し、気温の上がる日中にゆっくり換気するのが効果的です。また、湿度管理も重要で、幼い豚の場合は湿度65～75%が望ましいため、温湿度計で状況を正確に把握しましょう。湿度が低ければ、細霧散布や通路への散水で改善します。

2　鳥インフルエンザの発生予防

渡り鳥の飛来シーズンに入り、高病原性鳥インフルエンザの発生リスクが高まっています。農場では以下の３点を徹底しましょう。

①**人、物、車両の入出時対策**:衛生管理区域専用の衣服や靴を使用する。**着用前後で交差のない動線と明確な境界を確保する。**適切な車両消毒と手指消毒を行う。
②**野生動物対策**:飼置場の**清掃、死体や廃棄卵の適切な処理により誘引を防止**する。堆肥舎や鶏糞搬出口には**覆いやネットを設置し、破損箇所を修繕して野鳥や害獣の侵入を防ぐ。**
③**塵埃対策**:ウイルスに汚染された粉塵や羽毛などによるウイルス伝播リスク低減のため、**入気口にフィルターや不織布、細霧装置を設置**する。

消毒は特に注意が必要です。有機物が混入すると消毒効果が低下するため、靴底のブラッシングで有機物をしっかり落とし、消毒槽で消毒します。**消毒液はこまめに交換**しましょう。**緩みがちな手順を再点検する**ことが大切です。

＜真鍋＞